季刊

直江の津



◉直江津経済文化研究会◉

冬号

2003-4

12,1,2月

◉特集

働くまち 手しごとのひと

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

晶子に至る

知の楽しみ

南極越冬で考えたこと

～南極は環境を学ぶ教室～

ミニ特集

画家「下村静四郎・妙華」

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越(かみえちご)後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

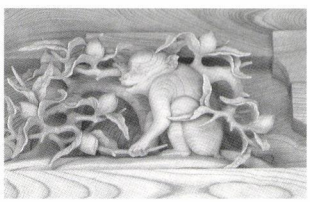
平成十三年三月

直江の津

第十二号　冬号
二〇〇三・〇四―十二・一・二

特　集　働くまち 手しごとの人　4
1920年代 こんなまち
巻頭エッセイ　晶子に至る　柳家小満ん　3
知の楽しみ　南極越冬で考えたこと　横山宏太郎　11
ミニ特集　画家「下村静四郎・妙華」　18
読書びと　私のアンネ＝フランク　松谷みよ子著　22
見る目　守護所の名品―上杉房定と京人―　24
東西海陸　23
バックナンバー　27

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治十一年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



五智国分寺三重塔

晶子に至る

柳家小満ん

直江津へは年に二回づつ、十年余の御贔屓になっている。即ち、あたしの落語二席と、越後の地酒を、二蔵づつ楽しむ、という風流な会（さんずいの会と称す）への、お招きである。直江津で最初に案内をされた〝名所〟は、ライオン像のある建物だったり、鏝絵のマリア像であったり、焼け残りの防火レンガ壁だったりで、他に名所が、御座なき候ものやと、怪しんだ次第だった。その後は、親鸞聖人上陸の地やら、五智国分寺やら、春日山城址やらと、追々に大口の名所案内となって、ひとまず安心をした。そんな一つに、松尾芭蕉の句碑《文月や六日も常の夜には似ず》があったが、これ又、閑散とした神社の一隅にあって、いささか拍子抜けであった。尤も『奥の細道』の〝越後路〟の記述も、至って簡略である。「酒田のなごり日を重ねて、北陸道の雲に望む。遙々の思ひ胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。鼠の関を越ゆれば越後の地に歩行を改めて、越中の国市振の関に到る。この間九日、暑湿の労に神をなやまし、病おこりて事をしるさず」とあって、文月の句と《荒海や佐渡によこたふ天河》の二句が並べてある。どうやら、体調が優れなかったようだ。曾良の『随行日記』によると、七月六日は、今町の聴信寺を訪ねたが、忌中の由にて断られ、折節の雨の中で、当夜の宿捜しに苦難している事が分かる。

宿の苦難といえば、森鷗外の『山椒大夫』へも思いが行く。「越後の春日を経て今津へ出る道を、珍らしい旅人の一群が歩いている」という書き出しで、これが、陸奥から筑紫へ左遷させられた父親を尋ねての、母子三人と女中の四人旅で、二人の子供が安寿と厨子王である。秋の日が傾いてきたが宿がない。近頃この辺りに人買いが立ち廻ッているので、宿を貸して足を止めさせるな、との高札が立っていい…るからである。仕方なく応化橋の下を宿とせんとした時に、かの人買いが現れ、言葉巧みに連れ去られて、悲運な物語となる訳だが、その安寿と厨子王の供養塔は、芭蕉の句碑のすぐ近くにあった。だが……、

直江津を人買船の出でぬとてふためきて追ふ山の雲かな（与謝野晶子）

の歌碑は、はたして、あるのだろうか。

落日が枕にしたる横雲のなまめかしけれ直江津の海（与謝野晶子）

の碑もあれば、ぜひぜひ、お目に掛かりたい。

（上越市縁者・噺家）

特集

働くまち

手しごとの人

高田のまち――、
慶長一九年（一六一四）松平忠輝の高田城築城にともなって、城下町として計画的に構築された都市である。
城と武家地を取り囲むようにして、城下町のほとんどが商人町や職人町で形成されている様を見ると、城を支える町というよりも、むしろ商工業都市という趣がある。



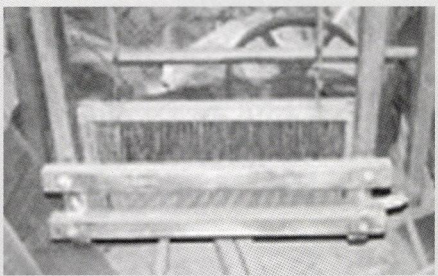
バテンレース
明治30年代に伝えられ、手仕事を組織化、原材料のブレードとともに欧米に輸出する近代地域工業の基となった。



紺屋
　春日山城下以来の伝統が続き、越後系あるいは高田藍型染めといわれる独特の染めが生まれた。

　まちは、営業特権を得た人達が職種によって集住しているため、町名でどんな仕事をしている人達かが分かる。また、肴問屋の集まる田端町の周辺には、桶屋や桧物（曲げ物）職人の町を置くなど、お互いの職業の便も考慮されたまちづくりがなされている。榊原氏時代の職種をみると、職人だけでも四〇種以上もあり、それに商人、肴や、旅籠、そこに働く人の数を合わせれば、北国街道屈指の都市であったことは想像に難くない。
　北国街道でもあるメインストリートには商店、旅籠などが並び、旅人が行き交い、土産を物色する人、客引きの声が響いていたことであろう。職人町では下駄を作る人、提灯を張る人、藍を染める人、漆を塗る人、肴やの匂い、親方の怒鳴り声が聞え、日暮れまで喧騒にあふれていたことであろう。
　それは明治に至って、バテンレース・ブレード工業、スキー工業を魁とする近代工業を受け入れながら、一方では江戸以来の職人技をも引き継ぎ、当時の商業地図を見ても、あらゆる職業の店が軒を並べ、地域経済を支える近代商業都市として変貌していったことが分かる。
　昭和四〇年代、〈時代〉という名の下に、脈々と受け継がれてきた町の仕組みを一気に覆して、日本中のまちが均一化し、どのまちでも手仕事の人達を表舞台から消してしまった。
　しかし、高田のまちを歩いてみると、名人気質とは違った、代々の仕事を受け継いできた職人が生きている。
　このような人達が生き続けられることこそが、まちの底力なのかもしれない。

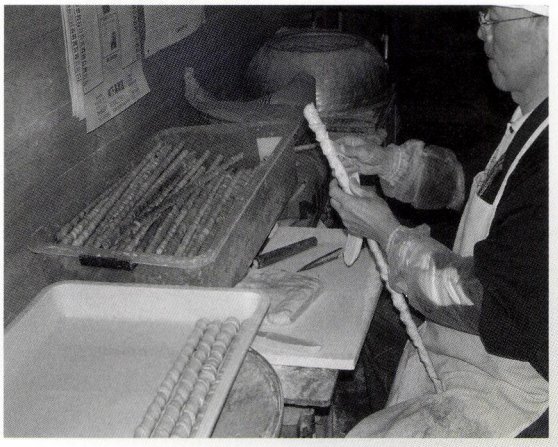




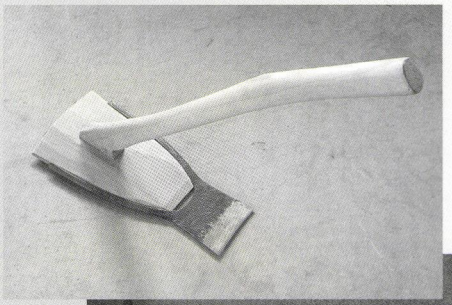
金網
　明治時代に手織り金網織機が開発されたが、餅焼き網などは手仕事であった。今は網そのものは既製品を使用しているが、特殊な篩（ふるい）などの製作をしている。

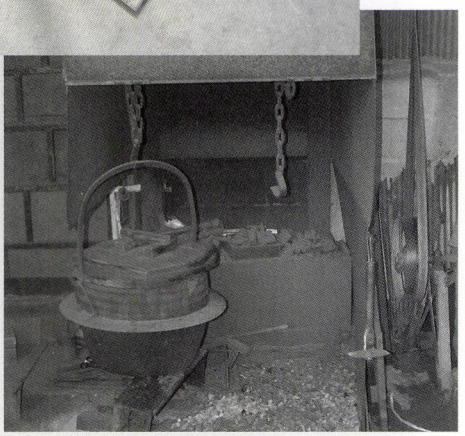


太鼓
　江戸時代から続く太鼓職人。力と微妙な技を今に伝える。伝統音楽を支える。

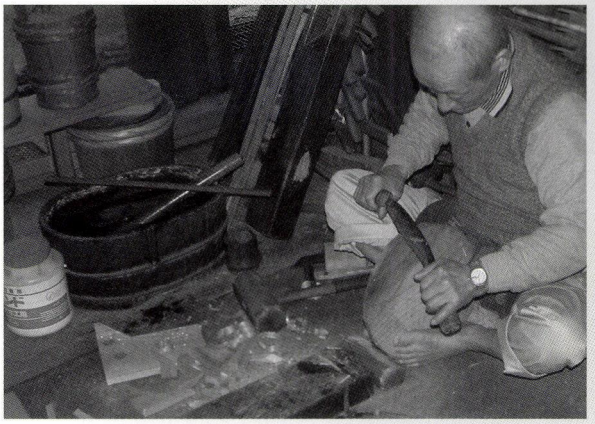


麩
麩ほど、その土地で違うものは無いといわれている。今も全て手作業で作られている。



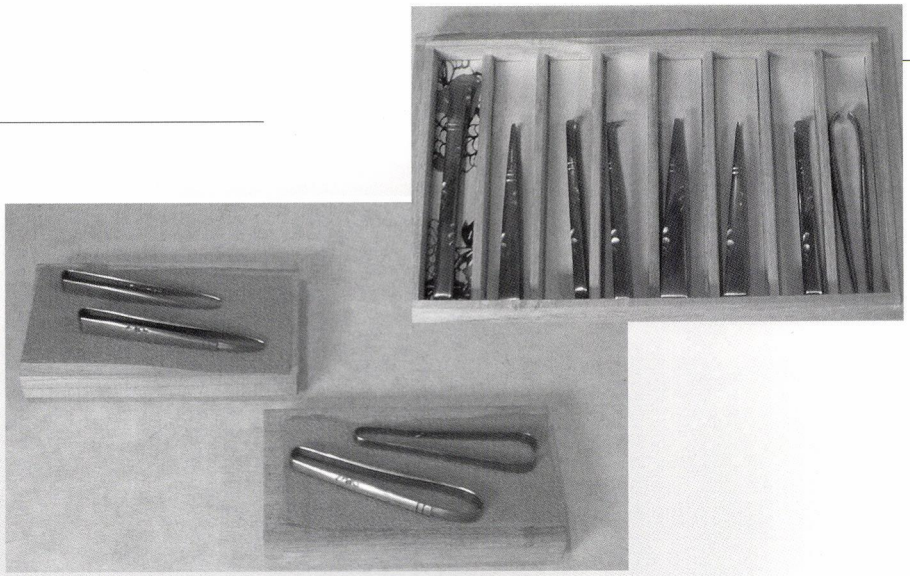


鍛冶
　初冬に貸してあった鍬を回収、翌年の春までに仕立て直して再び農家に貸し出すという、独特の「貸し鍬」も一軒になってしまった。

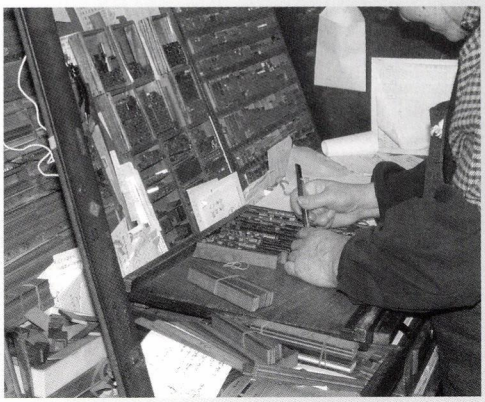


桶
　元禄年間から続く。家庭用の桶から味噌・醤油醸造用の桶まで手がける。市内で唯一となった。

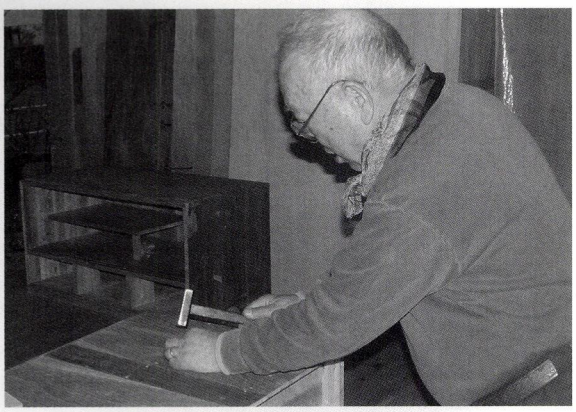
うぶげや・難波箪笥店・丸山印刷



うぶげや
　高田開府以来、肥後大掾の名を勅許されて代々「毛抜き」を作り続けてきた。現在 17 世が継いでいる。



活版印刷
　印刷の技法に関わらず印刷所の多さは、まちの文化度を測る物差しであった。活版の手技も捨てがたいものがある。

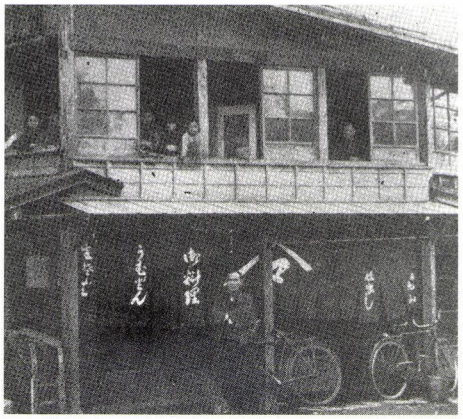


箪笥
　嫁入り道具に桐箪笥という時代ではなくなってしまったが、その技は脈々と伝えられている。

取材協力　吉田バテンレース・紺屋要次郎・梅澤金網店・砂山商店・篠宮麩店・角佐屋・金津桶店・

こんなまち

料理
旅館





荒物

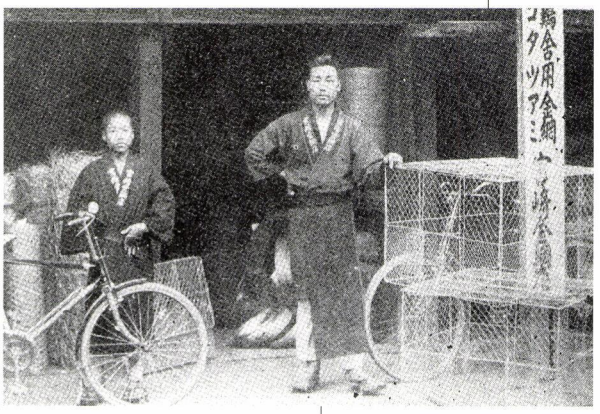


仏壇
塗師



染

金網

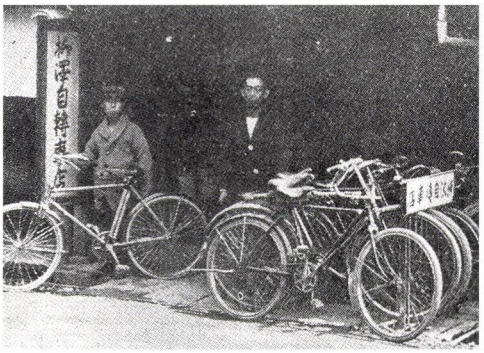


呉服





酒類
醤油



自転車



米



時計
蓄音機

鉄力細工・土丹板



ブリキ・トタン

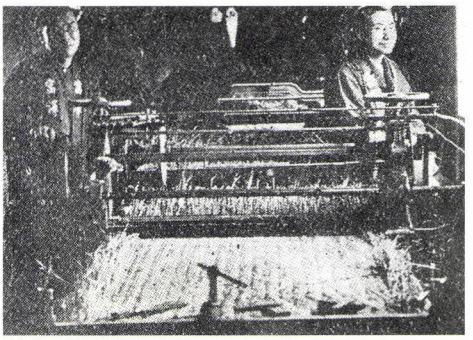


パン



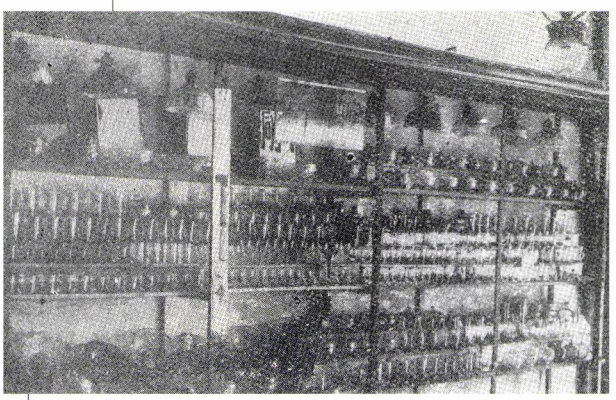
団扇

畳





菓子



硝子



書籍

お茶



桶



●知の楽しみ

南極越冬で考えたこと

～南極は環境を学ぶ教室～





■横山宏太郎 よこやまこうたろう

私の勤務先は、独立行政法人化で名前が大変長くなりましたが、昔の北陸農業試験場です。稲の品種改良をはじめとしていろんな研究をやっておりますが、私の所属は気象資源研究室で、作物から見た時に気象は一番外側の環境になりますが、〈農業は気象を資源・材料として作物を生産する産業〉と見ることもできます。まず気温が充分に高くないと作物は育ちません。そしてエネルギーとしての日射、体を作る水がないといけません。このように気象資源が充分にあって初めて、立派な作物が育つわけで、一番遠くですが大事な環境だといえます。

私はこの土地で育ちましたが、直江津側ですと〝海〟ですが、私はどちらかというと山の方を向いて遊んでいました。ちょうど小学校の頃、南極観測が始まって、宗谷という船が氷に閉じ込められてソ連の観測船オビ号に助けてもらった話、残して来た犬ゾリのカラフト犬、タロとジロの2頭だけ生き残っていたという話を新聞で見て、南極に行ってみたいと思ったようです。その後、南極やヒマラヤへ行くには、雪とか氷を研究することにしたらよさそうだというわけで進んだ道が、たまたま今に至っているというわけです。

地球上の氷の中で一番大きなものが南極の氷床、ほかにもヒマラヤの氷河などたくさんの氷がありますが、この氷が気候の変化によって量が変わります。また氷があることで気候にも影響を与えます。雪も同じことですが、私が興味を持っているのは、そういう気候と雪や氷の変動、その間の関係についてです。

地球の環境全体が変動するなかで、特に地球の温暖化が注目されている、では温暖化が進むと雪はどう変動するのか、日本の雪はどうなるんだろうかと数年前に同じ研究室の井上さんと調べたのがこの図[※1]です。現在では雪は平野部から海岸近くまでかなりありますが、百年後になると海岸平

野部一帯は、もう全く降らない、積もらないという状態になってしまう。雪が好きでやっている自分としてはこの結果には大変困りましたが、計算して出たものは仕方ありません。皆さんにはひとつの警告としてみていただいています。

南極観測自体は環境をいろんな分野で調べる研究室ですが、1年越冬しますと、いろんな意味で環境について学ぶことができる教室でもあります。

その南極で1年越冬して考えたことは、三つの健康です。

自分が健康であること
地球が健康であること、そうすると
財布も健康である

ということです。考える上でのポイントは、日常の生活が快適ならば良いに決っているし、楽な方が良いに決っている……、と思うのが普通ですが、本当にそうか？　ということです。そのことを南極のお話の中で考えていきたいと思います。

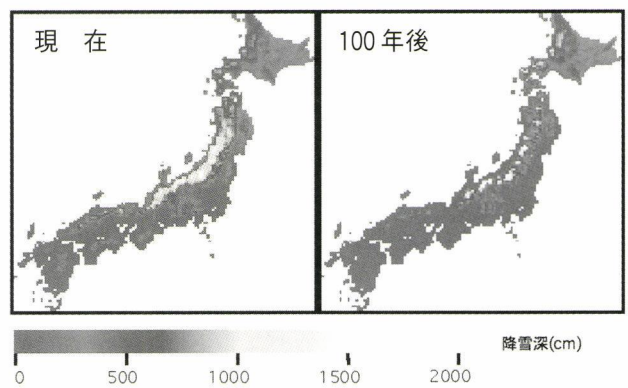
南極は日本の約40倍の陸地の上に、鏡餅みたいな形をした氷の固まりが、平均約2、500メートルの厚さで、つまり妙高山の頭がちょうど隠れるくらいの氷が乗っています。この氷が全部融けると海面が約70メートルくらい上がる計算になりますので、南極の氷の増減というのは大きな問題になります。温暖化するとどうなるか、100年後は、海面が50センチ前後の上昇と予測されています。わずかなようですが、簡単にいえば世界中の堤防を50センチかさ上げしないといけないわけですから、決して50センチといえども無視できません。

南極観測のなかで一番高いところの現象はオーロラです。美しいというだけではなく観測の対象として見ると、太陽からの粒子が地球に飛び込んで来る様子がオーロラとなって現れています。もう少し下がるとオゾン層、オゾンホールが問題になっていますが、実は日本の観測隊が発見した現象です。オゾン濃度の観測は一見なんの役に立つのか分からないような観測ですが、長く続けていたので異常にオゾンの量が減っていることが確認でき、国際的な観測でオゾンホールという状態が分かりました。オゾンホールの原因のフロンは、自然界には存在しない物質ですが、非常に便利な物質で冷蔵庫とかエアコンに使われていました。それが地球上の生物全体に対する危機の原因になったのです。しかし対策がとられたので何十年かすると状態は良くなるだろうといわれています。ちょっと気の長い話ですが……。

南極の厚い氷はどうしてできたのでしょうか？　降った雪が融けないでどんどん積もり、下の雪がだんだん押し詰められて硬くなって氷になります。それが平均2、500メートル、厚いところでは4、000メートルも積もっているわけです。その中には、雪だった時に入っていた空気が泡になって閉じ込められていますから、下のほうの氷を掘れば昔の雪と空気が手に入るわけで、それを順番に分析すると、炭酸ガスの割合がどう変わって来たかというようなことが分かります。

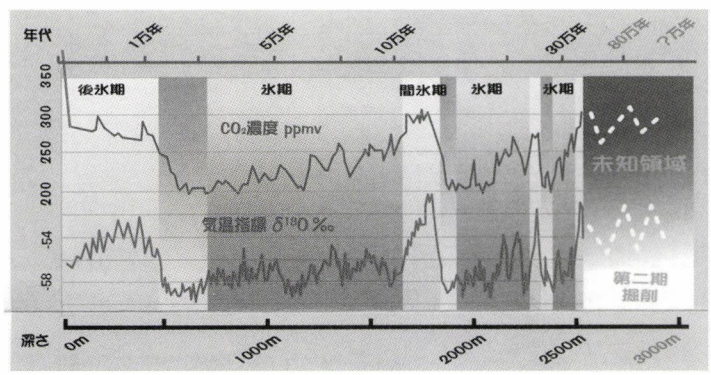
いまから約7年前に2、500メートルの深さまで氷をボーリングして、直径約10センチの柱状の氷のサンプルをずっと連続して採ることに成功しました。2、500メートル下の氷は約35万年前だろうと最初は考えておりました。いまは32万年前と計算されています。図2を見ると、炭酸ガスの割合がいろいろ変化しています。それと同期するように、暖かい時期、寒い時期、温かい時期、寒い時期を繰り返しながら寒い時期が約1万数千年前に終って温かくなり、今になっているわけです。こういう繰り返しがなぜ起きるのか未だよく分かっておりませんので、もっと詳しく調べようと、今度は3、000メートルの底、岩盤まで掘る計画が始まりました。80万年前まで

図1　地球温暖化で雪はどうなるのか？



井上・横山(1998)による総降雪深(12月～3月の降雪深の合計)の変化（左：現在、右：100年後)。「雪氷」60巻 367－378

図2　氷期―間氷期サイクル発現の謎に迫る



国立極地研究所「南極氷床深層掘削計画」パンフレットより。
グラフは上：炭酸ガス濃度、下：気温の指標

分かるだろうと期待しています。

次は海の中です。南極の海の中は外に比べると暖かく、外はマイナス何十度になっても海中は0度ぐらいですから、いろんな生物がいます。特に植物プランクトンがたくさん発生して、動物プランクトン、オキアミなどの餌になり、次いでペンギンや鯨などの餌にもなります。ウニやイソギンチャクなどいろんな生物がいるのが南極の海です。

炭酸ガス濃度の観測も南極でやっています。1年周期で変化をしながら、だんだん増加している様子が明らかです。大変困ったことで、これも対策が必要なことです。

これから南極での越冬終了までを順番にお話します。(文中の※数字は写真番号)

※1 写真は観測船「しらせ」の出港風景ですが、最初は宗谷という今から見れば大変小さい船でした。次に「ふじ」、その次が「しらせ」です。私が南極から帰った翌年、1996年に直江津港に寄港しましたので、ご覧くださった方も多いかもしれません。「しらせ」は世界でも最大級の砕氷船で、最近はよその船を助けに行くようになりました。船の大きさは倍々になって荷物をたくさん運べるようになり、観測も拡充し基地の施設も良くなりました。そうなると使う燃料も増えて、最初に比べると燃料が約10倍になっています。ということはそれだけ温暖化の元といわれる炭酸ガスをいっぱい出しながら南極観測をしているということになります。

「しらせ」は海上自衛隊の船で、動かす人達は海上自衛官です。私達のような隊員はお客さん……、荷物かも知れませんが、乗せて行ってもらうわけです。隊員が総勢約60名、乗組員が約180名で、数人づつ見送りに来ても大変な数です。船は東京を出るとオーストラリアへ向かいますが、※2 航海中もバケツで海水を汲んで、海中に炭酸ガスがどれくらい融け込んでいるかといったデータをとっています。南極観測はこういう地道な観測の積み重ねです。


1


2


3

オーストラリアに1週間ほど碇泊して物資を補給します。生鮮食料品の補給が主ですが、南極は楽しみの少ない所ですから、やはり飲み物が大事ということでビール、ワインなどたくさん持って行きます。本当にどれぐらい持っていったかは結果が恐いので計算しておりませんが……。

オーストラリアを出ると暴風圏という年中天気の悪い所に突入します。砕氷船は底は丸いので低気圧に遭うと大変な揺れ方で、これまでの最大は56度くらい傾きました。これを乗り切って、※3と11頁の写真 写真のように氷山が見え始めるとようやく南極へ近付いたと喜んだり、ほっとしたりです。

氷の上にのし上って船の重さで氷を割り、バックして、また前進するということを繰り返しながら氷の中を進んで行きます。この氷は南極大陸の氷とは違い、冬の間に海の水が凍った「海氷」で、南極の周りに張りだして、厚い時には3～4メートルという厚さになります。「しらせ」は3メートル少しまでは氷を割れますが、私が行ったときは運悪く4メートルくらいの氷がどんどん出てきて、ついに昭和基地に接岸できませんでした。接岸できないと物資を運ぶのに大変なことになりますが、逆に翌年は何とこれまでで一番早く昭和基地に着いています。南極の自然の大きさ、変化の幅の大きさを思い知らされました。

南極の氷というのは実はゆっくり流れています。冷蔵庫の氷を見ても分かりませんが、氷は軟らかい性質を持っており、大きな塊になると自分の重さに耐えかねて広がって来て、谷間になっている所を流れ出して来ます。そうは言ってもこの大きさ、なかなか分からないと思いますが、※4 写真にチラッと見える物は小型雪上車ですので、この氷河もかなりの大きさです。昭和基地の南の方に

ある白瀬氷河（日本人で初めて南極を目指した白瀬中尉の名前を取った）は幅が約7キロあります。このような氷河が、伸ばした舌のように海に浮かんで、先が割れて離れれば氷山になります。こんなにたくさん流れたら氷が無くなりそうな気がしますが、それを補うのは大陸の表面に少しずつ降る雪です。その増減の差し引きが大事で、今のところ、どんどん減るという傾向にはありませんが、しかし、広い所を少し調べて計算するものですからまだ不確かなので、もっと詳しく調べています。

一方、陸地は全く殺風景そのもので、木はもちろん草もありません。苔が薄く岩にへばりついているくらいですが、写真[※5]の湖には、いろんな藻が生えていて、やはり水の中が豊かな場所ということが分かります。

いよいよ南極昭和基地です。いくつかの日本の基地（他は閉鎖中）がありますが、一番大きなメインの基地です。今はこの写真[※6]よりさらに建物が増えていると思いますが、順々に建物を作ってこれだけの大きさになったわけです。左奥に見えるドームの中には、人工衛星から観測データを直接受けることができるアンテナが入っています。辺鄙なところでありながら、意外な最先端のものがあるのも南極の一つの姿といえます。

昭和基地のヘリポートまでは海上自衛隊が物資を運んでくれますが、そこから先は隊員の仕事で、トラックに積み込んで基地に運びます。建物の建設も全て隊員の仕事です。そうはいっても素人だけでは無理なので、例えば本物の鳶職さんや大工さん[※7]に参加、指導してもらいます。

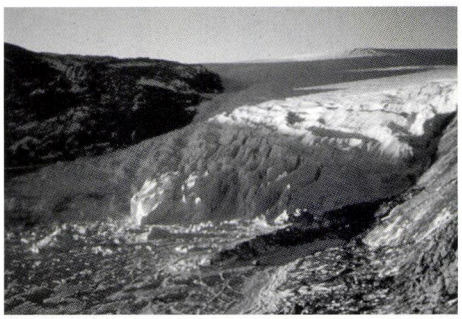
食堂の写真ですが、なかなかゆったりとした感じで夕食をしております。35次隊の調理担当は、東京のある有名な所にいたフランス料理専門のコックさんと、もう一人は巡視船のコックさんの二人でした。40人の越冬で1年間となると調理も大変な仕事ですが、ある意味一番大事な仕事かも知れません。写真[※8]の冷麺や西瓜は意外な感じがするかも知れませんが、半袖で仕事をしているくらい、夏は建物の中も随分温かくなります。

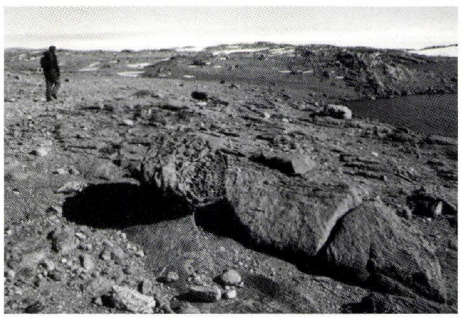
生野菜はどんどん傷みますので、人工的[※9]に栽培をする装置も使って、少しだけですがつくります。越冬の後半になると緑色の葉っぱが1枚あれば、それだけで大喜びというわけです。そういう時に冷凍食品が活躍します。南極の場合にはそのまま外へ出しておけば冷凍……、というわけにはいきませんので冷凍庫を使いますが、冷凍食品のお陰で南極の食生活は随分豊かになっております。

食糧を含めて途中の補給は一切なし、船で持ち込んだ物資で1年間を過ごします。食量は約40トン、越冬隊員40人で割ると1人で1年間に1トン食べている勘定になります。このような数字は、南極だとよく分かるわけです。

お風呂は、ほぼ毎日入りますが、1人で1日に使う水の量は約100リットルで、日本ではだいたいその2、3倍使っていることになります。節約すれば、それでも快適な生活ができることが分かります。

何をするにも熱や電気が必要ですが、発電機[※10]のエンジンは、まさに昭和基地の心臓です。発電機は3台（当時）あって、動いているのが1台、整備中が1台、待機中が1台です。このエンジンの熱を使って、配管を通した水を循環させて雪を融かして水を作ります。みんなで水槽にスコップで雪を放り込んで水を作りますから、なるべく節水しようという気になります。節電すれば燃料の消費が減ります。南極の越冬で燃料を使い果たしたらそれこそどうにもなりませんので、日々の節電は重要なことです。日本のなかで考えても節電し


4


5


6


7

たらどうなるかというのはよく分かりませんが、南極はそこに発電機があって燃料タンクがありますから、そういう関係がよく分かります。発電に使う燃料は、年間で約４００キロリットル、１人当り１０キロリットルですから、１年間、大型のタンクローリー１台分くらいを１人で使っている勘定になります。

毎日一生懸命仕事をやりますので、くつろぐのも大事なことで、バー[※11]もあります。南極は不便なこともありますが、意外にいろんな物が揃っているというのも南極です。このバーのカウンターの右側にはバーテンがおりますが、隊員が交代で務めています。奥にきれいなお姉さん……、これは写真ですね。

３５次隊では、女性隊員は夏隊で魚の研究をする人がいましたけれど、越冬中は男ばっかりでした。最近では女性の越冬隊員が続々と行っております。今年はお医者さんも１人、女性と聞いています。

南極の自然は厳しく、ブリザードは台風の時に雪が降っているような状態です。その後は埋[※12]まった飛行機を掘り出し、雪を掻き出して整備して飛ばす、整備士は一人だけです。南極はどの分野も人手不足ですので、お互いにとにかく助け合っての１年間です。

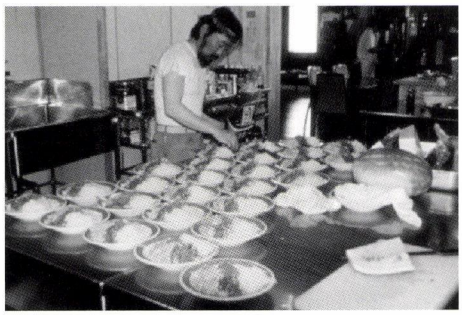
南極で一番戸惑うのが太陽の動きです。東から昇って西へ沈む太陽が、南極の場合は、夏には、夜になって太陽が低くなっても、沈まないでまた上がってしまいます。つまり昭和基地の場合、１ヶ月半ぐらい１日中ぐるぐる回っていることになります。逆に冬になると、頭をちょっと出してすぐ沈んでしまう。真冬になりますと頭を出さなくなります。自分の足の下で回っているような感じになる。それがやはり１ヵ月半ですので、どうしても調子が狂います。冬はそのようなことで過ごしにくい季節ですが、それも乗り越えて１年間過ごすのが越冬隊です。

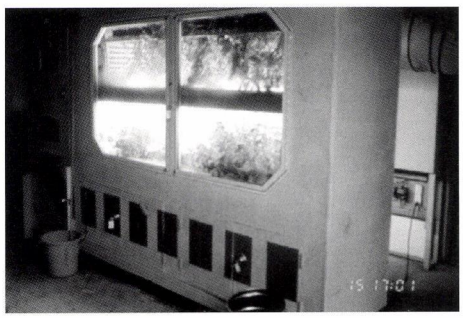
冬がオーロラ観測の本番ということになります、空一面に広がったカーテンのような光の幕が、ゆっくりと形を変えながら動いて行く様子は神秘的という言葉がよく似合うように思います。しかし、この頃になると昭和基地もマイナス３０度前後になりますので、やはり長時間眺めているとたまらなくなって中に入ってしまいます。

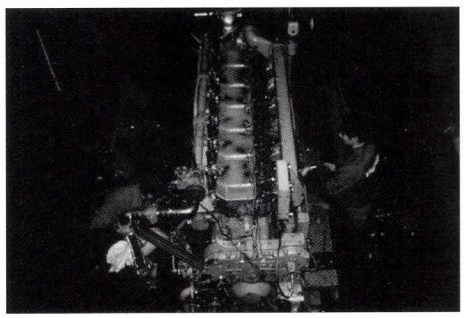
日本の夏至が南極の冬至になるわけで、南極全土がお祭りをします。大体３日３晩ぐらい飲めや歌えの大騒ぎです。このご馳走も合わせて１人１年１トンの食糧です。バレエ「白鳥の湖」の衣装がどうしてあるのか分かりませんが、「何でもある」というのも南極です。[※13]この露天風呂はお祭りの時の恒例で、雪を掘り下げて底に青いシート敷いて湯船を作り、車のラジエーターを入れて発電機のエンジンの冷却水を引っ張って来て沸かします。たいへんいい湯でした。

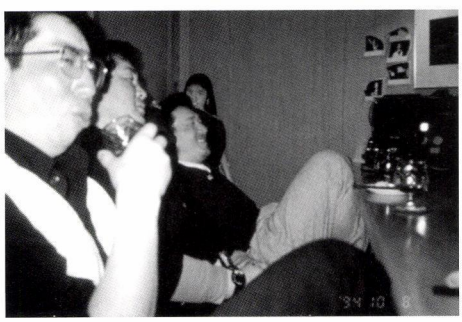
こんなことをしながらようやく暗い冬を乗り切ってアザラシが来るころになると夏です。写真[※11頁]はアデリーペンギンという体長６０センチぐらいの可愛いペンギンですが、陸地の上で夏の間に卵を産んで雛を育てます。ペンギンは、はたから見るとのんびり歩いているようですが、実は一生懸命歩いているんです。もし遠くまで海氷が張り出していると、餌をとってくるのに時間がかかって雛が飢え死にすることもあります。南極の環境の変化によってペンギンの数も変わる、そんなことも報告されています。

写真[※14]は越冬後半で、大分汚くなったヒゲ面の連中が向かい合わせに座って、缶ビールもあるようです。昭和基地近くの氷山の上ですが、よく見ると溝が掘ってあって、ここを素麺が流れて来る。


8


9


10


11


12

夏になるとみんな調査に出て、帰りの船までもう会えないので、大お別れパーティーをやった時の様子です。こういった遊びのネタは後から後から沸いてきて不思議なくらいです。

昭和基地の夏は大体0度前後で、冬になってマイナス30度前後、最低気温がマイナス45度ぐらいですから、それほどとんでもない寒さではありません。ところが大陸の中へ行きますと高度も上がり、どんどん寒くなります。今回新しく基地を作った「ドームふじ」は標高が3、800メートル、予想では平均気温がマイナス60度、ひょっとしたら地球上の最低気温が観測されるかもしれないと言っておりました。これまで観測された最低気温はマイナス89・2度で、30年近く前にロシアの基地で観測されたものです。ドームふじではマイナス90度まで行くかも知れないと楽しみにしていましたが、意外なことに80度まで行かずに79・7度がこれまでの記録です。

雪上車は後ろに[※15]橇をつないで走って行きます。大変勇ましく走っているようですが実は時速7キロぐらいで、ドームふじまで1、000キロ、20日間の旅行です。長岡市の大原鉄工所で作っている世界最高といってよい雪上車で、大体バスをちょっと短くしたくらいの大きさですから、その後ろの方で寝ることもできますし、炊事もします。

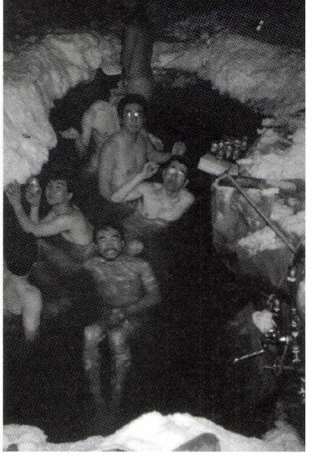
これは[※16]マイナス40度ぐらいの様子で、目出し帽の前が氷の板になっています。気温から考えるほど着ぶくれていません。みんな羽毛服ではなく合繊の綿の入った防寒服です。1年間の越冬で大分寒さに馴れてきていますから、この旅行では最低気温マイナス67・5度を記録した時でもこの恰好でした。やはり馴れる力というのは大変なものだと思います

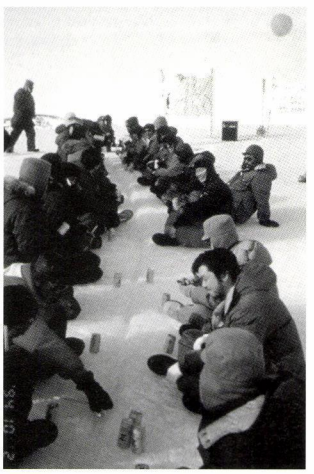
そういう旅行で大事な仕事が燃料補給です。ガソリンスタンドはありませんから、自分達が[※17]引っ張っている橇のドラム缶から燃料を入れていきます。車の燃費は1リットルで何キロ走ると言いますが、雪上車は1キロ走るのに何リットルと表示します。写真の大型雪上車は、あれだけの橇を引っ張る力がありますが、上り坂で1キロに4リットル強消費して行きます。燃料は特別の軽油ですがマイナス50度になると相当トロッとしてきます。それを1回に200リットルぐらい入れるわけですが、電動ポンプは寒さで役に立ちません。そういう時に確実なのは簡単な構造の手回しのポンプと人間です。

橇に乗せて運んでいった荷物は基地を作るパネルと燃料です。パネルは冷凍庫に使われている材料で、日本の場合と中、外の温度が逆転しているからちょうどいい材料です。このようにして新しい基地を作って、先述のような氷のボーリングをする事になったわけです。そのために燃料もたくさん運びました。それだけ貴重な氷の試料です。

[※18]旗竿の長さを測っていますが、これも観測の一つです。旗は雪上車で旅行する時の目印に立てるものですが、繰り返し測れば、年間どれぐらい雪が積もるか分かるわけです。

最近は南極の環境を調べながら南極を汚してはいけないということで、ゴミはほとんど持ち帰ります。車の排気ガスは残念ながらそういうわけには行きません。生ゴミ・紙くずなどは燃しますが、灰は持ち帰って処理します。人間の排泄物も浄化槽ができましたので浄化して海に流しています。今はどの国も南極の環境を維持するように心掛けております。帰国が近づくとゴミを[※19]整理し、計量して持ち帰る支度が忙しくなります。私達の時で、ゴミが40トンありました。40人が越冬して持ち帰ったゴミが1人当り1年1トンだったわけです。こういうことも、日本では毎日ゴミ


13


14


15


16

を出しながら計量はしませんのでなかなか分からないことです。物を持ち込んだ量、使った量、それによって出てきたゴミなどの量、そういうものの量がよく分かるのが南極です。

これは除夜の鐘です。なければ作るのも南極というわけで、こんなこともやったりしながら1年間を過ごします。40人もいると本当に多士済々、特技もいろいろで、いろんな人がいて、上手くいくというのもよくわかる南極越冬です。最後に越[※21]冬したメンバーを見ていただきます。バニーガールの恰好をしている者もいたり、本当にいろいろですが、年齢は当時で25歳から52歳、南極での仕事は勿論いろいろ違いますし、日本での立場も違い、食べ物の趣味も違う。という風にいろんな人たちが集まっての越冬ですが、そのお陰で上手くいったというのが南極越冬の結論かと思います。

このような1年間を過ごしながら考えてきたことが、快適で楽であることが、エネルギーや物をたくさん使い、さらには自分の体の持っている力を無駄にしてしまう。寒さに馴れる力、暑さに馴れる力、そういうのを無駄にしてしまうことになりますから、あまりこれに頼り切らずに、少し苦労をしていた方が自分の体の力を発揮して健康に過ごせる、ということです。

つまり、冒頭に言いましたように、自分も健康になる、地球にとっても良い、物を使わないということは財布にもよろしい、ということになります。

昭和基地へ1年間分として持ち込む物資の総量が1,000トン。そのうち1人の消費燃料が10トン、食糧が1トン、水の消費量が1日10リットル。1年で出すゴミが1トン。これが日本の生活だったらどうなるんだろうか。本当に調べてみたいところですが、恐らくいろんな物をたくさん使っているのが日本の生活ではないかと思います。これを少し反省してみる必要があろうかと思っているわけです。

1年間越冬してきて、一緒に越冬した隊員が「隊長、日本に帰ってきたらゴミの分別が南極に比べて随分いい加減で気になってしょうがない」と言ってくれました。これは本当に嬉しく思いました。充分に「環境」を勉強して帰って来てくれたんだなあと思いました。南極は環境の研究室であり、また環境の教室でもあるという所以です。

本日はご静聴ありがとうございました。

＊本稿は、2003年8月23日に行われた、おえつ信金倶楽部総会における講演内容を抄録したものです。

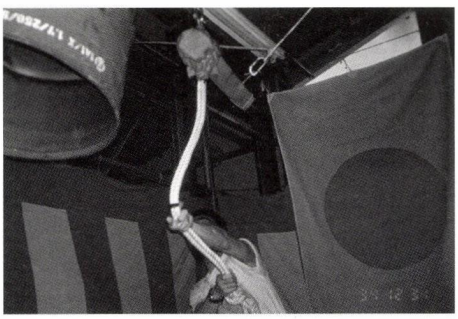
プロフィール
1947年　東頸城郡浦川原村に生まれ、9歳から高田で育つ
京都大学理学部卒業
同大学院理学研究科地球物理学専攻単位取得退学
理学博士
現職
独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構
中央農業総合研究センター北陸研究センター
北陸水田利用部　気象資源研究室長
1993～95年　第35次日本南極地域観測隊　越冬隊長


17


18



19


△ 20

▽ 21



ミニ特集

画家「下村静四郎・妙華」



冬の直江津

明治二〇年（一八八七）直江津に生まれる。祖父は地元の書家水嶋太郎右衛門。幼くして絵画を好み、高田中学校を卒業とともに上京、東京美術学校（現・芸大）に入学、石井柏亭に師事し洋画を学ぶ。

柏亭に愛され、師の渡仏に同行する予定であったが、病を得て帰郷。以降、中央画壇へ出ることはなかった。しかし、しばしば画友の来訪があり、後に洋画界に名を成す人達を養成した陰の人ともいわれている。初期には後期印象派の影響を受けた作品が多いが、洋画ばかりではなく、妙華と号し水墨画も能くした。

昭和二六年没、享年六五歳。

知れるところでは、昭和四九年に上越市立総合博物館で開催された「郷土画人展」で四点、作品が公開されたのみで、その作品と画業について、ほとんど知られていない。

人となりについても「郷土画人展」図録と『直江津町史』などからわずかに推測されるだけである。いわゆる芸術家の風貌の持ち主で、営利には恬淡、ある日、飄然として知人宅を訪ね、しばし逗留することもあったという。

今回、たまたま所蔵者のご好意を得て、誌上でお目にかけることができたが、その人物像と画業については、依然として謎のままである。

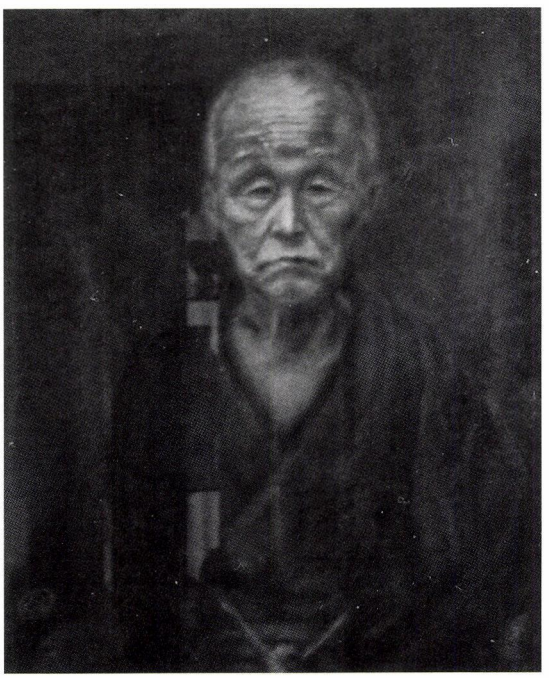
※作品は個人蔵



山　水　図



花



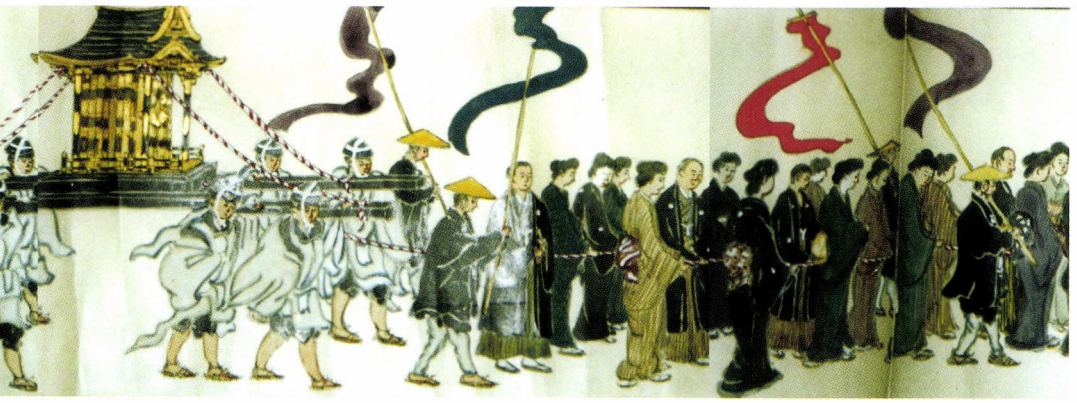
某氏肖像

石井柏亭　一八八二(明一五)～一九五八(昭三三)
東京芸術学校を中退、中村不折・浅井忠に学ぶ。二科会・一水会の創立に参画。パンの会にも参加。高村光太郎・与謝野鉄幹・夏目漱石などと親交を結ぶ。日展幹事、芸術院会員。

聖徳太子像奉納絵巻
観音寺蔵









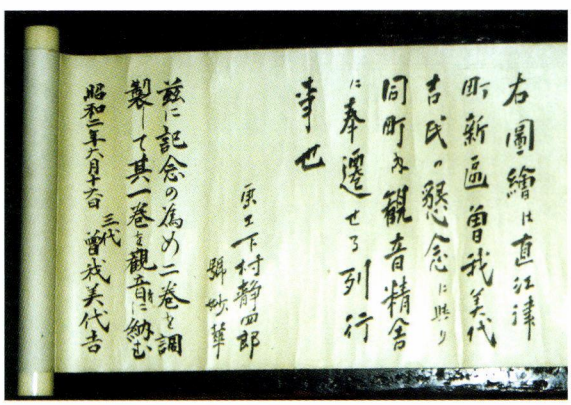


作品は、巻末に「画工　下村静四郎　号妙華」とあり、大正一五年（一九二六）五月一六日、直江津・新町の曾我家から観音寺へ聖徳太子像が奉納されるとき、曽我家の依頼を受けた静四郎が、大神宮入り口の東京亭の階上からその行列の盛儀を観覧して描いた、彩色の絵巻である。

一年をかけて二巻を描き、うち一巻は昭和二年（一九二七）六月一六日、観音寺に納められた。

なお、奉納された聖徳太子像は、観音寺住職「一世代一開帳」ということである。







読書びと



私のアンネ＝フランク

松谷みよ子著

偕成社刊
一二〇〇円

久方ぶりに細君と黒姫童話館を訪れたのは、晩秋の霧に包まれた日であった。新収蔵の寄贈資料による「松谷みよ子の世界」展の会期末に間に合って、半世紀に及ぶ活動の軌跡に触れるひと時を得た。受付の女性スタッフによれば、信濃町立の施設である童話館では増床リニューアルを予定、来春より「松谷みよ子」常設コーナーをオープンする。『モモ』や『はてしない物語』の作家、ミヒャエル・エンデのコレクションで多くのファンをもち、人形劇や朗読会のためのホールを備えるこの文学館からの新たなる発信である。

松谷美代子(本名)は、一九二六年に四人兄弟の末っ子として、東京神田に生まれた。「虎の門事件」や「高松事件」を手がける社会派の弁護士として活躍する父と、読書の悦びを手ほどきする母の膝下に育つ。信州に疎開していた松谷は敗戦直後より坪田譲治に師事し、五一年に『貝になった子供』で児童文学者として世に認められる。

人形劇サークルを立ち上げ、そこで劇団太郎座の創設者・瀬川拓男と巡り会う。結核を病み手術と療養所生活を経て結婚、〈山賊の巣の中に連れてこられたお姫様のようだった〉と夫が書き残した、乳飲み子を抱きながら雑用・飯炊き・脚本書きをこなす劇団との共同生活の日々を過ごす。

生をすり減らし愛憎の果てに婚を解く。童話館の展示に並ぶ瀬川の遺作集や解散した劇団の資料集は松谷が編んだ。別れて後も様々に向き合ってきた一組の夫婦の絆を、九二年に『小説・捨てていく話』(筑摩書房)と題して長年の読者に手渡した。

瀬川に触発されて始めた民話採訪の活動から誕生した『龍の子太郎』と、珠玉の連作『ちいさいモモちゃん』シリーズ(何れも講談社)は、多岐に亘る松谷みよ子の仕事の基点として今も読み継がれている。「文化運動」の不実と虚妄を知り尽くした彼女が拘りぬく《母性》の一点が、その党派性への違和をも補って余りある陽性な倫理を生んだ。

『私のアンネ＝フランク』(偕成社)は一九七九年上梓された。NHK「私の本棚から」で奈良岡朋子の朗読により放送された記憶がある。

原爆へ踏み入りタイムファンタジーの手法をとった『ふたりのイーダ』(六九年・講談社)、桑取谷の和瀬田重蔵宅の炉端に取材し、小正月の鳥追いの村を舞台に新潟水俣病への想いを籠めた『死の国からのバトン』(七六年・偕成社)、につづく〈直樹とゆう子の物語〉のかなめの作品といえる。

『ふたりのイーダ』では三歳の幼女であった主人公のゆう子は、誕生日の記念に母親より日記帳を贈られ、一緒に渡された『アンネの日記』に足をすくませつつ、架空の友人として語りかける。「アンネ＝フランクさま　わたしは十三歳になりました」と書き出されるゆう子の弾むような日記と、アンネと同年生まれの母蕗子のアウシュビッツへの旅日記を織り交ぜ、一九七八年の夏から暮れにかけてのわれらが経た時代を綴る。

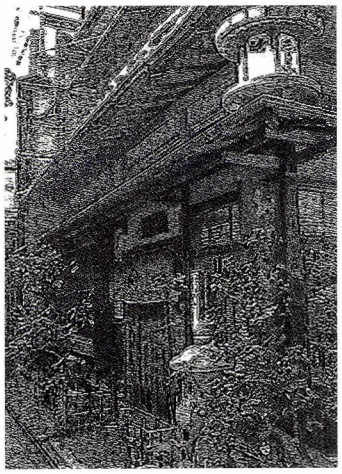
ルポライターを職業とする蕗子は松谷の分身といえる。津軽の婆さまが語った「鬼の目玉」の昔話。〈盲目の鬼に目玉を返せと責めさいなまれる若者、若者は知らぬと言い続けるが娘は「見るなの蔵」から見つけた目玉を鬼に渡してしまう〉、という主題に重い問いかけを感ずる蕗子の独白が胸を突く。

思いがけず友人と二人で出かけたアウシュビッツでの松谷の実体験が、「鬼の目玉」を単に戦争というお題目に置き換えるのではない、この混迷の世紀に忘れてはいけない課題を彫り上げる。

岡部伊都子や澤地久枝とともに、記憶を風化させる時代に異議申し立てを続ける松谷。児童文学の区切りで言えば〈小学上級から〉と記される総ルビの文章で、司修の装丁とペン画で飾られながら、直樹とゆう子の物語を書き紡ぐ。

「振り向いて思い出の戦争を語るのではなく私達の掌にある戦争をみつめたい」現代民話の語り婆松谷みよ子の、忘れられない一冊である。　(薪)

東海 東陸



ど

なたか忘れたが、左のような句を詠んだ俳人がいる。

江戸っ子の妻の雑煮にわれ不満

たしかに、江戸風というか東京風の雑煮はさっぱりしていて、わが地の雑煮から見たら「しらっ」として見える。逆に、

「こちとらっ江戸っ子でぇー」

という向きには、

「正月を祝おうってのに、なんでぇーこりゃー」

という、田舎くさくて野暮な雑煮に見えるであろう。

物の東西を考えるときの難題の一つが、この雑煮である。欠かせない具（「こう」という土地もある）は何か、餅は丸か四角か、焼くのか焼かないのか、汁は味噌か醤油か澄ましか、餡が入っているのかどうか。食べるのは元日か二日か。

この狭い上越でさえも「これが無ければ、雑煮じゃない」という主力の具が、鮭であったり鶏（鴨）だったりするように、手におえない代物である。

さて、筆者にとって正月を祝うもう一つに汁粉がある。大坂の「夫婦ぜんざい」で代表されるように、京大阪・東京などでは「甘味処」で日常的に出される食べ物だと知ったのは、成人して東京住まいになってからのことである。

東

京・神田の伝統的建造物群に指定されている甘味処で、初めて味わった汁粉の品のよさ、そして、立派な身なりの紳士が入って来るに及んで、これは自分が知っている汁粉ではないと、つくづく「都会」を思い知らされた。それと合わせて、そこにあった「ぜんざい」と汁粉とは、どこが違うのだろうか？　という疑問が残ってしまった。

その、汁粉とぜんざいを東西で分けてみると、

こし餡汁
　関西　汁粉
　関東　御前（御膳）汁粉
つぶ餡汁
　関西　ぜんざい
　関東　田舎汁粉
汁けのないつぶ餡（白玉や蒸し栗が入る）
　関西　亀山
　関東　ぜんざい・小倉ぜんざい

関東では、汁けがあれば総じて汁粉といえるようだが、ことここまで来ると、もうどうでもよくなる。

汁

粉の語源はよく分からないが、ぜんざいは、一休さんが「〈善哉（よきかな）〉この汁」と賞味されたところから命名されたといわれている。また小倉・亀山の語源は、

小倉山みねのもみぢば　こころあらば
　いまひとたびの　みゆきまたなむ

の、紅葉の色と餡の色を掛けて「小倉」になったものだとか、小倉山の向こうから来る丹波大納言小豆の美味しさを、ここは敢えて丹波とは言わず小倉としたとか、小倉山の先端にある亀山の美しさから付いた名前だと言われている（亀山は店の名前だという説もある）。

ともあれ、筆者が食べていた大きな餅が入った「汁粉」とは違った、なんとも奥深いものがある。

（沽）

目見る（みるめ）

守護所の名品 ―上杉房定と京人―

平成四年八月二〇日、一片の焼物が直江津の駅南から出土していることが判明しました。蓮弁文と呼ばれる特徴的な文様が描かれた染付で、中国の元の時代に作られた焼物とわかったのです。その後注意を払って調査した結果、最終的には数十片出土していることが確認でき、当時、日本海側で最も北で出土したものとされて全国的な注目を集めました。一〇年が経過した現在でも、秋田県の男鹿半島で一例の出土が報じられたのみで、まとまって出土した例としては今でも日本海側の最北となっています。出土した地点は直江津駅の南口になっているところで、かつては至徳寺という寺があった場所と考えられていました。しかし、一辺二六〇mもある堀で囲まれた館であることが判明し、現在は越後府中の守護所と推測されています。

元の時代に中国で作られていた染付は、本来中東やヨーロッパに輸出されるために作られたものとされ、世界で最も多く残されているところはトルコの首都イスタンブールのトプカプサライ博物館といわれています。もともと、東洋人の焼物趣味は青磁と白磁であって、染付は亜流であったようです。名器と呼ばれるものに青磁や白磁が多いのは日本人の好みによるものといえます。しかし、元の時代に開発された染付の技法はヨーロッパの人々に珍重されて以来、現在まで焼物の主役の座に就くことになりました。

さて、このような優れた焼物がどうして京都から遠く離れた越後に持たされたのでしょうか。写真の染付の年代は一五世紀中頃と考えられていますので、その当時の越後の動静からみてみます。

宝徳元年（一四四九）上杉房定が越後守護に就任しました。当時各国の守護は在京することが通例となっていましたが、房定は翌宝徳二年（一四五〇）突如越後府中に下り、そのまま亡くなるまでの四〇余年府中で政務を行っています。房定を「府中様」と称していた古文書も残されていますので、その権力の大きさを知ることができます。房定は守護在職中、時の室町幕府八代将軍足利義政に莫大な金品を贈り、越後安国寺のために大蔵経を朝鮮から求めたり、当時の守護としては破格の「相模守」にも就任しています。

また、京都から多くの人が越後府中を訪れていることも知られています。管領細川政元と同行した冷泉為広や全国の山伏を統率していた聖護院の門跡准后などがその代表的な人物でした。

このような京都の文化人を招くためには宴の開催に相当な財力が必要であるばかりか、宴に使用する食器が京人の目を楽しませるものではなくてはならなかったと推測されます。越後に下るまで京都で暮らした房定にとっては、越後府中にあっても京都に遜色ない自らの生活を開陳する絶好の機会であり、宴はそれを誇示するために行われたといっても過言ではないでしょう。そのためにも、房定は財力と知友の在京文化人を駆使して京都から名品を請来したものと推







測できます。

また、これらと一緒に出土した陶磁器は茶の湯に使用された道具であることもわかっています。したがって、賓客をもてなす茶道具としてまとまって所持されていたものが火災によって壊れ、捨てられたものと考えられます。火災は永正の乱によるものでしょう。

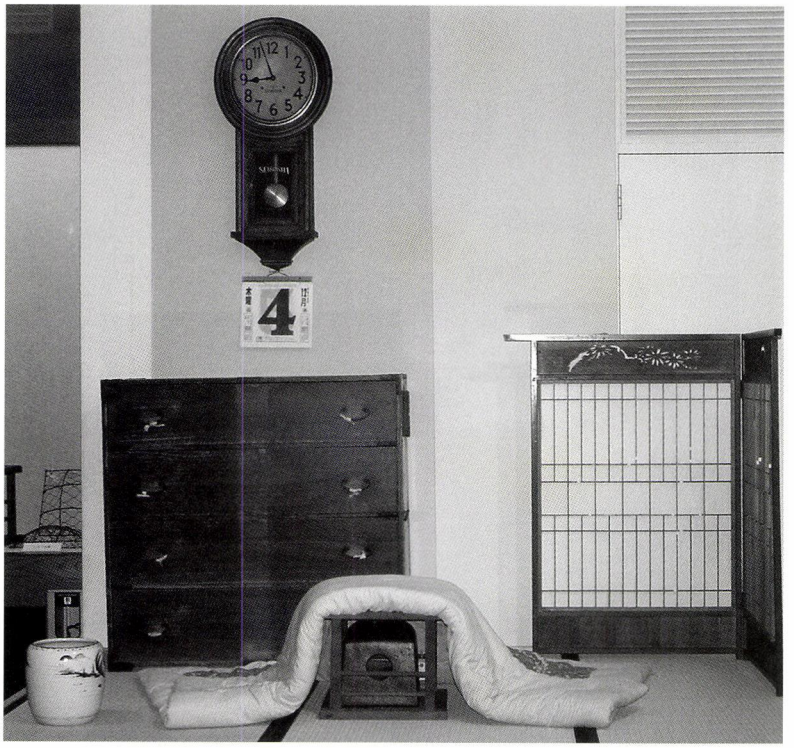
焼物は現在の私達の生活にとっても欠くことのできない必需品です。現代でも高価なものから一山いくらの雑品まで多種多様であるように、いつの時代にあっても名品は名品としての存在意義があったのでしょう。

なお、焼物は好みです。名品が万人にとって名品と成り得ないことも付け加えておきます。（編・小）

写真右
染付　玉壷春（そめつけ　ぎょっこしゅん）
右上の破片の大きさ
天地約7センチメートル
想定復原の大きさ
天地約30センチメートル
右上の紅い焼物は釉裏紅という。破片は小さいが紅の発色はすばらしいものといわれている。

写真左
染付　盤（そめつけ　ばん）
天地の直径　約20センチメートル
盤は所持層が限られるといわれ、皿とは明確に区別されている。

ちょっと“さぶい”けど なんとなく豊かでした。

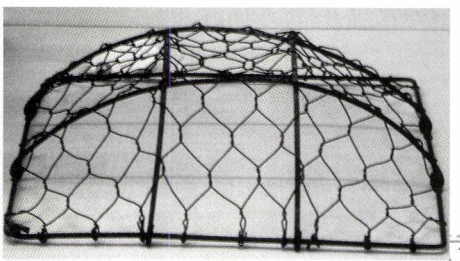


「昭和」がブームになっているが、ほんの数十年前までは、写真のような風景など、あたりまえのことであった。しかし今、このような生活を望むのは、逆に“贅沢”といわれてしまうかもしれない。



夜着（夜具・掻巻）

「昔のくらし」
上越市立総合博物館
’04. 1月16日まで



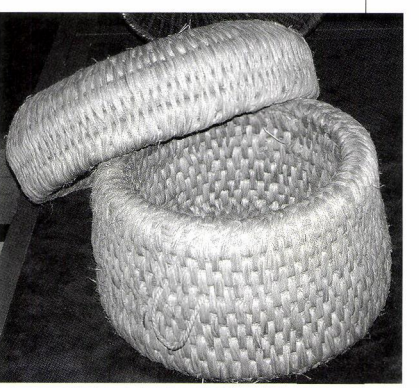
炬燵の金網



かくまき
こんなおしゃれなものもあった



あ ん か



つづら
保温のためにお櫃を入れたり乳児を入れた

■編集室から■

南極の横山さんから戴いた名刺は、さすがに環境を考える人、アート紙のカレンダーの裏を利用した手作りであった。

南極といえば、南極観光の添乗員の面白い考察がある。欧米人は、双眼鏡をのぞいたり、スケッチブックを片手にペンギンなどを観察しているのに、日本人は一様にうつむいて歩いている。彼等のしていることは、ソフトボール大の石を決まって2、3個拾っていて、そのため日本人の帰りの手荷物が極端に重くなってしまうということである。

「屋台まち」は、都合により休載しました。

投稿募集・内容の問合せ

投稿をお待ちしています。企画、執筆者への感想・意見・反論・身近な随想など、気軽にお寄せください。

フリースペースは、研究論文・提言・意見発表・創作発表の場です。テーマは自由ですが掲載について、多少の審査を行いますことをご了承ください。掲載文には僅かですがお礼をさし上げます。

投稿には、お名前・年齢・住所・電話番号を明記してください。フリースペース以外は匿名も可能ですが、その場合も氏名・住所をお書きください。

あて先

〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
☎〇二五(五四三)九七一五
FAX〇二五(五四三)二〇二五
北越出版内「直江の津」編集部
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊「直江の津」冬号
第三巻四号　通巻十二号
発行日／平成十五年十二月二十日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
直振興業内
☎〇二五(五四五)〇二〇二
発行者／なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

第四巻一号（春号）
四月二〇日 発行予定

年間定期購読（四冊一九二〇円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

■バックナンバー■

2001年3月　第1号　春号
年間特集　直江津を掘る
1福永家文書から幕末明治の直江津の町並みを復元する　浅倉有子
2掘ったら何が見えるか直江津
— 中世都市・越後府中・直江の津 —　小島幸雄

2001年6月　2号　夏号
年間特集　直江津を掘る
3湊町から臨海工業都市へ
— 直江津の産業史 —　赤羽孝之
4人々のくらしに息づく「祇園祭」
—囃子の伝承を通しての一考察　近藤美保子

2001年6月　3号　秋号
年間特集　直江津を掘る
5フォッサ・マグナを境にした東西日本文化と南北の国土軸　市川健夫

2001年12月　4号　冬号
年間特集　直江津を掘る
6古老が語った直江津の昔

2002年3月　5号　春号
特集　イントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー　エドウィン・ダン

2002年6月　6号　夏号
特集　1　米山をめぐる民俗文化　渡邉三四一
2　報道のなかの祇園祭

2002年9月　7号　秋号
特集　1　直江津五智遊覧の旅
2　直江津の再生　江塚友之

2002年12月　8号　冬号
特集　1　西横山小正月行事
2　直江津・五智十二景

2003年3月　9号　春号
特集　「海の恵み」—高田のまちに見える海の印象—
ミニ特集　高田のまちの近代洋風建物
知の楽しみ　日本一のカラスのまち　中村雅彦
フリースペース　直江津の音楽文化 — その2　海の入り日・上越市民吹奏楽団　箕輪響
見る目　直江津ゆかりの兄弟画家
わたしの直江津　なぜか、直江津　森子朗
読書びと『タマリンドの木』池澤夏樹著

2003年6月　10号　夏号
特集　人が支える「頸城」の大地
知の楽しみ　たのしいおいしい考古学　岡村道雄
フリースペース　今町が生んだ力士越ノ海勇蔵　村山和夫
見る目　木造一鎮倚像
わたしの直江津　マニキュア　佐藤光子
読書びと　若きこころの旅　太田愛人著

2003年9月　11号　秋号
特集　「鉄道唱歌」の旅人
ミニ特集　江戸城攻略弐万弐千歩のたび　吉越泰雄
知の楽しみ　海の総合的試験研究機関と共に歩んで　伊藤信夫
フリースペース　越後から大江山へ行った酒呑童子と茨木童子　三田村優
見る目　五智国分寺三重塔
わたしの直江津　夕陽と酒　田中孝司
読書びと　中島敦　父から子への南洋だより　川村湊編

■「直江の津」が購入できる所　なおえつ茶屋(バックナンバー取り扱い)／柿村書店／エルマールブックセンター／春陽館／ラ・ソネ菓寮

季刊

直江の津

発行／平成十五年十二月二十日■発行者／なおえつ信金倶楽部■発行所／直江津経済文化研究会■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)